

子ども編

災害時の スペシャルニーズ 支援ハンドブック



災害時に孤立する人を生み出さないために

災害時、子どもが「その子らしく」いられるために

大きな災害が発生すると、命を守ることや生活を再建することが優先されます。その長い復興の中で、子どもは周囲を気づかい、遠慮や我慢を続け、ときには心から遊ぶ時間、場所、仲間も奪われてしまいます。

近年では、大きな災害時には災害ボランティアセンターが立ち上がり、多くのボランティアが活動するようになりました。しかし被災した市民の中でも、多数派の生活支援ニーズが優先され、元気そうに見える子どもや高齢者など、本来なら「災害時に特別な配慮を必要とする人」であるにもかかわらず、支援が後回しになりがちです。行政機関自体も被災する中で業務に追われ、子どもへの十分な支援は期待できません。

一方、普段から子ども支援に取り組む NPO や各種グループ・団体において、避難訓練など命を守る準備は進んでいます。しかし、団体自身が被災する中で、どのようにして早急に態勢を日常に戻すかについては、あまり準備が進んでいないのが現状です。

本ハンドブックは、平時から子ども支援に取り組む団体が、ボランティアや地域から協助・共助を受け入れながら、また、自助で団体運営を立て直す際の参考になることを願って作成しました。子どもが災害を経験することは決して被害を受けるだけでなく、その体験をいかしてポジティブに力強く生きていってほしいと願っています。行政などの公助については、他の資料などをご参照ください。

なお、本書は 2016 ～ 2018 年度に実施した「災害時のスペシャルニーズ支援事業」の成果をまとめたものです。事業実施にあたっては、大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業として 3 年間採択していただきました。また多くの方に研究会やアンケート調査などにご協力いただき、知見を提供していただきました。心よりお礼申し上げます。

大規模災害時、
子どもを守り育む視点から、変化するフェーズ（局面）を捉えてみたら…

大規模な地震などが発生した場合、安全の確保、安否確認、そして避難所の開設と、平時には想定していなかった緊急時の対応が始まります。こうした中、家庭、学校、地域の子どもたちを取り巻く生活環境は激変し、子どもの心身の健康や成長発達に様々な影響が出てきかねません。

不安、恐怖の体験から
トラウマをもつ

被災者として深く傷つく

ガマンが続き、子どもなりに
周囲に遠慮する

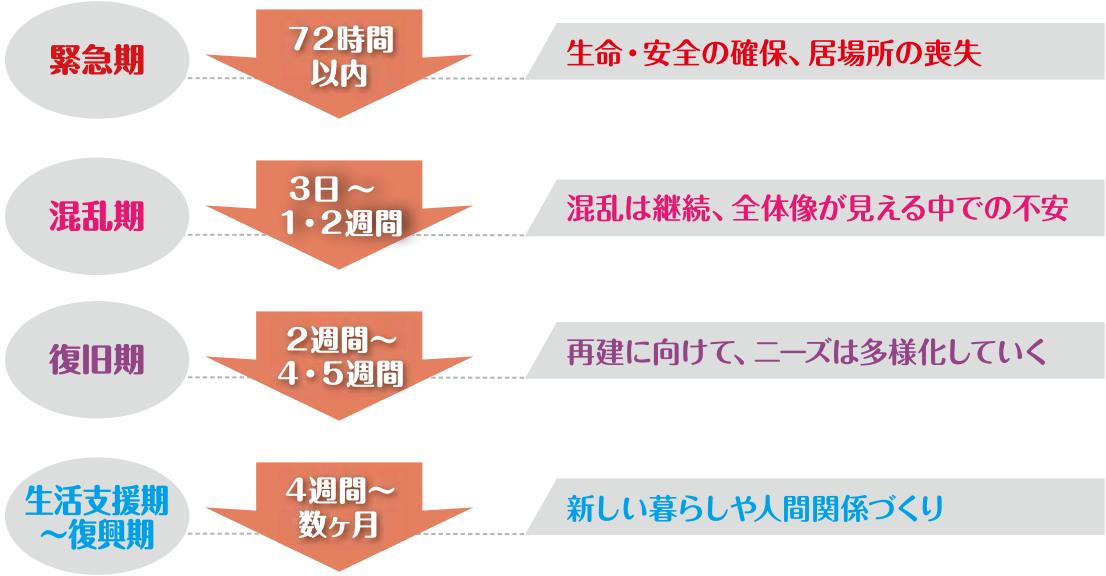
他と比較されたり、
無理にがんばろう！とする

感情を押さえついたり、
あきらがちになったりする

周囲の様々な喪失が理解できず、
自責の念を持つ



その子らしくいられる、子どもらしくいられる、その貴重な時間が奪われていく。子ども支援に取り組む団体の“備え”があることで、緊急時に子どもが少しでも自分の時間を取り戻すことになるでしょう。そこで、起こりうる事態を事前に押さえておくことが、その一助になるのです。



目次

時間の経過とともに変わるポイントと対応・・・3

ケースから学ぶ災害時アクションのポイント・・・6

災害時につながっておきたい人々・・・10

平時から取り組んでおく、大阪での防災活動事例・・・12

緊急時の子どもの支え、保護者の支えとなる
支援にとっても心強い情報・・・14

団体内部の会議や勉強会で



複数団体の関係者が集まる研修の場で



本冊子の使い方

まずは、ざっと目を通して概要をご確認ください。もし、役立ちそうだと感じられましたら、本ハンドブックを片手に「もし災害があったらどうする？」「事前に準備しておくべきことは？」などを、各団体で話し合うことで、災害時の大きな支えにしていいただければ幸いです。

緊急期
(72時間以内)

人命救助と安全確保が最優先で、周囲による互助活動が中心になる時期です。避難所での共同生活を強いられ、食事、排泄、睡眠など生活に不可欠なことが優先されます。多くの子どもが極度の不安と恐れを感じます。

普段から保護者との緊急連絡体制の相談を。



子どもと保護者にとって…

- ・家族の無事、身の安全を確認することが難しい。
- ・想定外で、個別性の高い様々な事象に直面する。



まずは情報を収集し、被害を把握する。

子どもの活動に取り組む団体にとって…

- ・事業活動の停止・縮小の判断や、スタッフの安否確認を迅速に進める。
- ・活動場所の建物や設備面の被災ダメージを確認する。
- ・保護者の元に子どもを返すのが難しい(想定通りにいかない)。
- ・スタッフ自身が被災し、身動きが取れない。

混乱期
(3日～1・2週間)

少しずつ地域の状況が見えてくるようになります。避難所が生活の場として整ってくる反面、共同生活の中で個々の生活に対する不安は増大し、体調不良や近隣トラブルが増えてくる可能性があります。



ストレス軽減できるよう、遊び場や居場所の確保を。

子どもと保護者にとって…

- ・子どもが気持ちを言葉にできなかったり、体調の変化があることがある。
- ・乳幼児は不安に陥りがち。赤ちゃん返りしてしまう子もいる。
- ・学童期の子どもは、たとえば学校が避難所になったことに戸惑い、感情を発散したり安心できる居場所を失うことがある。
- ・学校の先生は児童のケアに十分手が回らない。



子どもの活動に取り組む団体にとって…

- ・これまで取り組んできた事業について、今後の方針を決める。
- ・災害が起きたからこそ見える新たなニーズに直面する。
- ・他の地域の団体による活動が加わり、新たな連携が求められる。

情報収集をしながら、できることから着手する。

復旧期
(2週間～4・5週間)

避難所での生活が長期化し、多くの人が疲労感をもっています。緊急対応の収束に向けて、早ければ避難所の統廃合が始まります。こうした変化によって、子どもは新たな不安や不信をもつことがあります。



子どもたちの理解度や心理的負担を考えながら、寄り添うことが大事。

子どもと保護者にとって…

- ・新たな避難先や仮設住宅への移転など、新しい環境に適應する負荷がかかる。
- ・事態を理解できる年代の子たちには、感情を出してよいと伝えることが大事。

子どもの活動に取り組む団体にとって…

- ・復旧度合いによってニーズに個人差が出てくる時期なので、個別的な対応が求められる。
- ・外からの支援団体との役割分担や連携が進む。
- ・支援活動の継続、収束、次への展開を考える必要に迫られる。

子どもや若者にも役割を作ることで、自信につながる。



生活支援期(4週間)～復興期(数ヶ月)

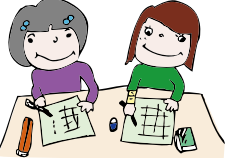
自宅が被災し戻ることができない場合、避難所から仮設住宅などへの移転が進み、新しい地域での生活が始まります。新たな関係づくりに困難が伴ったり、孤立してしまう人を生み出すこともあります。それは子どもたちも例外ではありません。



遊び、交流、学び…を充実し、分断を生み出さないような工夫を。

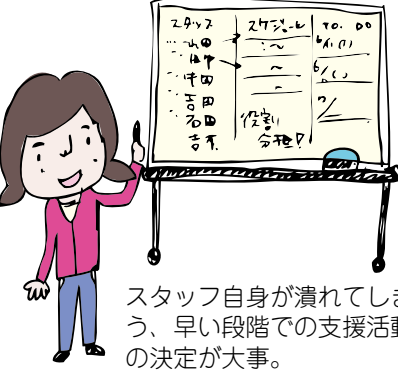
子どもと保護者にとって…

- ・仮設住宅など限られた環境では、「子どもは遊びを通じて育つ」ということが忘れられがち。
- ・避難所から仮設住宅への移住の場合、居住地が分散し、学校以外で友達と会える機会がなくなりさみしい思いをすることも…。



子どもの活動に取り組む団体にとって…

- ・支援者の疲労が蓄積し、興奮状態で疲れに気づけなかったり、緊張から解放され無力感に苛まれることも…。
- ・団体のリーダー自身がストレス対処を率先して行い、スタッフが休める環境づくりを進める。



スタッフ自身が潰れてしまわないよう、早い段階での支援活動ビジョンの決定が大事。

子どもの成長を育む復興に向けて

大きな災害からの復興には、相当な時間が必要です。この期間、子どもたちは数多くの恐怖や喪失を体験し、子どもらしくいるという当たり前の権利を奪われ、何かしらの影響やダメージを受けています。大人にとっては数週間の出来事であっても、子どもにとっては、一日、一日が深く心に刻み込まれます。被災から日常を取り戻す過程で、子どもたちが「喜び」や「希望」を見出し、自信や自己肯定感を高めていくことができれば、「精神的復興」につながっていくのではないのでしょうか。



赤ちゃん返り、心や体調の変化は、大規模災害時、子どもの誰にも起こる自然な反応です。

せ

んだいファミリーサポート・ネットワーク

事例紹介

2013年、子育て家庭支援を目的として、仙台市内で長く子育て支援にかかわってきたメンバーを中心に設立。仙台市子育てふれあいプラザの運営、子育て支援に関わる事業を展開する傍ら、子育てに関する人材育成や地域連携など、子育て環境と子育て支援の充実に取り組んでいる。

2011年3月、災害発生時

東日本大震災が起こった時、仙台市の子育て支援施設「のびすく仙台」（指定管理運営）で活動していましたが、避難訓練想定を意識して動くことができました。ただ「早く帰りたい」という親子を先に帰したのですが、後から、その親子が家に辿りつけなかった話を聞きました。また、役所は当時パニック状態でどうにも対応できる状況ではありませんでした。避難訓練で想定してなかったことが災害だと痛感しました。

まだ緊急時の段階でも

津波で被災した家族や、不安になった親子が施設にやってくるようになりました。そういうニーズがあるのだとわかり、4日目から活動を再開。近所に友達がなくなった、不安で家にいられないなど、普段の活動以上の対応に迫られました。9日目ののびすく開館のニュースがテレビに流れると、90人の親子が来館し、その翌日からは100人を超える親子が来るようになりました。

発災後3カ月後

ひろばにいる母親たちの様子が少しおかしいな…と感じるようになりました。親がイライラしていたり、ちょっとした喧嘩を始めるなど、感情のコントロールができない状態が出てくるなど…。そこで、母親たちのしゃべり場を託児付きで実施。すると、直接被害を受けてない人にも個々の傷つきがあることがわかってきて、被害を受けている人、受けてない人、それぞれの心労が浮かび上がったのがこの時期でした。また、子どもにとっても、この時期、子どもなりに吐き出せる場の必要性も感じました。子どもにとっては、「津波ごっこ」など、遊びの中で昇華できる機会が本当に大事で、心を開放できる場が必要だと思いました。

運営上に課題も

行政からの委託や指定管理の事業でストップする事業が出てきましたが、事業が停止になると事業費を支払われないことになり、経営上はとても困ってしまうことに。しかし、支援活動をストップはできませんから、現場のスタッフが「休めない」状態が加速します。なんとか共催にして支援金を得て活動を実施するなど工面しましたが、こういったことも起こるのだと知っておくことは必要だと思いました。

復興段階において

復興への時間は被災の状況や程度では測れないと感じました。大切な家族や友人との別れ、家を失い生まれ育った地を離れなければいけないなど、大きな被害を負っても、気持ちを切り替えて前に進める人もいれば、人から見れば何も被害を負っていないように見えるが、ずっと恐怖から逃れられない人もいます。人の心は千差万別。自分の尺度で決して測ってはいけないということを、時間が経つほど強く感じるようになりました。

緊急時は「想定外」の連続！ ポイント1

いくら避難訓練とはいえ、「平時」における訓練。しかし、突然やってくる「緊急時」は、「想定外」の連続です。行政機能が麻痺する可能性も考えて、日々の運営を考えておきましょう。

情報不足からの不安が最大に ポイント2

情報を求めるニーズや、子どもや保護者が安心できる居場所へのニーズが多くなります。子どもや保護者が求める情報や居場所を積極的に提供したり、組織として事業を継続できるための環境整備が求められます。

直接被災していない人にも目を向けて ポイント3

小さい子どもの場合、保護者の回復が子どもの回復に直結します。子育て世代が元気になる環境を用意したり、被災者だけを対象にするのではなく、地域の子どもの育みを地域がどう支えるかという視点が重要です。

フェーズ（局面）をとらえながら、事業の停止や縮小・拡大を判断 ポイント4

スタッフの休息にいつも以上に気を配りましょう。多くの人が無理をしがちです。遠慮せずに休暇がとれるよう環境を整え、積極的にセルフケアを促すことが大事です。

日常からのネットワーク形成を ポイント5

被災した地域だけが復興に向けて努力するには限りがあります。広域的なネットワークやつながりを生かし、助けをうまく得る「受援力（じゅえんりょく）」を発揮しましょう。平時から積極的に、他の地域の団体も含めて日々のつながりを形成することで、緊急時でも多様な支援を得られるようになります。



女性のためのくつろぎサロン「わたしじかん」



ママからのメッセージ

団体からのメッセージ

せんだいファミリーサポート・ネットワーク

伊藤仟佐子さん

被災の状況は刻一刻と変化をし、復興の度合いも地域や人によって異なります。今必要な支援が、明日必要とは限りません。支援には被災や復興の状況を確認し、現場の声に耳をかたむけながら進めていかなければ…と。また、私がしたい支援ではなく、どんな支援を必要としているのか、相手の立場や環境を見極め、慎重に進めていくことが大切になるでしょう。支援の終わりは支援者が決めることではなく、被災者や現場の声を最優先に考えていくことだと思います。



山次世代スクール協会

事例紹介

2017 年、次世代の教育を考えるための取り組みをしようと 3 つの私塾の塾長メンバーが開始。話し手の高山さんは、普段は総社市で私塾（学塾 誠和学舎）を塾長として経営し、復興支援事業では当協会事務局を務めている。2019 年 4 月、一般社団法人化。

2018 年 7 月、
西日本豪雨災害発生時

突然の豪雨災害。近隣の町である岡山、倉敷の災害規模が大きいことを知り、各メンバーができる範囲で物資支援を開始しました。夏休みが近づく中、「子どもの居場所」が減ることを危惧し、何か取り組む必要性を感じていたこともあります。倉敷市では、多くの学校が避難所となっており、その避難所の一つ、蘭小学校の校長先生と話をし、関わりの可能性を考えていきました。

発災 2 週間後から

協会の活動として、学習室＋居場所づくり事業をスタート。主に学校、倉敷市教育センターと連携しながら進めました。蘭小学校に、被災した小中学生を対象にした「まなびのひろば」を開設。開設後 2 週経った頃から、「外部支援者として、子どもにとっての日常をどう作るか」という視点をもって関わろうとしました。7 月末から、学校では「学校運営の日常を取り戻す」ことに力点が置かれ始め、学校再開に向けた動きが強まってきた時期でした。学校現場での活動に民間が入ることの限界を感じた日々で、市教育委員会とお盆や週末に開室する案を協議しはじめ、次の動きにシフトしていきました。

発災 1 カ月後から

5 つの小学校（避難所）、公民館における学習室のボランティア調整の活動を開始しました。子どもの学習に関わるボランティアを各学習室に配置。お盆以降は、岡山大学・作陽大学・中国学園大学など県内大学の先生とのつながりから、教育系の学生や知合いの教育関係者を調整し、8 月末までこの調整活動を続けることになりました。

復旧段階、夏休み後半から

中学生にとって、居場所が必要なことは見えていたので、お盆から、中高生向けの「まなびのひろば」を真備公民館に開設しました。生徒たちが何をしても大丈夫、という安心できる居場所としてスタート（友達と一緒に来たり、再会できる場所としても）。小学生と違い、中学生には勉強以外の「役割」や「取り組み」を用意する必要があることを感じていたため、夏休み終了に合わせて、真備町内の中学生による活動団体「MSB30」を設立。11 月 18 日に「まびっ子」のための秋祭り、12 月の「MABI STUDENT FES」を、MSB30 のメンバーを中心に企画し、大人が外部支援者として活動をサポートする形で作っていきました。

「学校」という公教育の現場に
避難所が設置される現実 **ポイント 1**

子どもたちにとって、学校（＝教育）という大事な場が緊急時の避難場所になることだけでも衝撃的な変化です。この影響を受ける子どもに直接関わる学校現場の先生方と対話を重ね、復旧に向けたイメージを深めていきたいところです。

学校現場の疲労度に、
どう寄り添うか **ポイント 2**

多くの学校教員には、緊急対応がひと段落すると、「学校を再開させたい」「非常時対応を早く収束させたい」などの意向が強まる傾向が見られます。支援関係者は、「外部の力を受け入れる」ことに不慣れな学校関係者が多いことに配慮しながら、活動を進めましょう。

情報発信と連携を生かし、
次の活動へ **ポイント 3**

協会では、地元の間支援組織である岡山 N P O センターによる仲介やネットワークの連携によって、早くから教育委員会を巻き込んだ会議や協議できる場をもつことができました。情報発信と調整は労力がいるますが、変化の激しい被災地だからこそ、復旧イメージを考える上で非常に大事です。

子どもの「回復」は
個々それぞれ **ポイント 4**

「あの子は元気そうで大丈夫」と思えるようであっても、子どもが学校で見せる顔と他で見せる顔は違ったりします。子どもの多様性と彼らの多感さを受け止めながら、向き合っていきましょう。



MSB30 初回ミーティング



MABI STUDENT FES
開会前 ミーティング

団体からのメッセージ

岡山次世代スクール協会 高山和成さん

子どもにとっては、学校も家も大事な場所。そしてこういう緊急時には、それとともに、「サードプレイスの居場所」が彼らにとって大事なものになります。「学外部活動」のような取り組みとして、単なるイベントを友達で企画するという方法だけでなく、自分たちが真備の人間として真備のために何か作り上げていくことが、若者のアイデンティティを形成したり、自分が生きていこうとする場所を自ら作っていく未来の道筋づくりに、大きな影響を与えるでしょう。子どもにとっての復興支援は、そういった場の提供とともに、地域の一員としてのアイデンティティの形成に寄与するような取り組みを開発していく必要性を感じます。



なぜ、つながることが必要なのか

災害時の訓練をするとき、職員やスタッフが全員そろっている前提でやっていませんか？ 災害が起これば、交通機関が麻痺したり、自分の家族を守るのに必死だったりして、出勤できない人が多いです。頼みの綱の行政機関自体も被災し、十分な支援は期待できません。一方、子ども支援団体は普段の利用者でない人からも頼られます。

こうして態勢が弱まる中で増大するニーズに対応するためには、支援団体も周りに頼ることが必要です。被災地域外の子ども支援団体や近所の人など、視野を広げれば頼れる人はたくさんいます。また、アウトドア系団体など異質な人々とながっていると、自分たちにはない経験や道具を持っていて助けられることもあります。



子どもの主体性を第一に：子ども防災リーダー養成講座
 (ハートフレンド)

地域の小学生や中学生に防災に関心をもってもらい、いざという時にどのようにして自分の命を守っていくかを考えて実行できる力を育むことを目的に「子ども防災リーダー養成講座」を2013年から実施してきました。毎月1回、中学生や高校生リーダーが会議や研修を実施して、講座の内容を考え、11月には、桑津小学校で一泊避難所体験として講座を開催。桑津小学校はぐくみネット、青少年指導員会、そしてハートフレンドが主催し、多くの地域の団体の協力と、行政や専門家に応援いただいています。

小学生で参加した子どもが、中学生、高校生になり、さらにジュニア・リーダーとして主体性を持ち運営しています。地域の中で、子どもを中心に世代を超えたつながりを「防災」をテーマに創っていき、さらに多くの団体に参加していただき、地域家族ぐるみでの「つながり防災活動」を目指します。



サバイバルマスター認定制度で、防災力を上げる
 (72時間サバイバル教育協会)

72時間サバイバル教育協会では、子どもの防災意識を上げることで周りの大人も巻き込んでいくことをねらいとして、サバイバルマスター認定制度を行っています。ライフラインがストップした時でも工夫して生き抜くための、8つのプログラムの講習を行い、検定に合格するとワッペンが授与されるという仕組みで、単発の体験会などで終わらずに、減災教育を継続したいという学習意欲を引き出すことを大切にしています。

現代社会は情報過多の時代であり、ネットなどで見たことある、聞いたことあるというだけでやったことが無いことでもできると多くの人が思い込んでいますが、体験活動の中でしか本当の理解は深まりません。協会では、子どもたちが自ら考え行動することができるように、様々な体験型の講習の中で協会認定の指導者が、学習のサポートを行っています。これまでに、ホテルやNPO、大学、自然学校などとタイアップして、学び続ける子どもたちを育成しています。



親子で防災！カフェから防災部へ発展
 (にしよどにこネット)

西淀川区は三方を海と大きな河川に囲まれ水害に非常に弱く、大雨や津波が発生した場合、河川氾濫や津波浸水など大きな被害が起こると想定される地域。私たちが運営する子育てひろばを利用する子育て家庭からは、災害への不安な声が多く聞かれました。

そこで、2015（平成27）年度から『みんなではなそう！にしよど防災カフェ』を区役所と協働して開催。防災マップを見ながら同じ地域に住んでいる人と一緒に考え、防災グッズなど各家庭の備えについて話し合い、災害に関する疑問や不安を解消し、いざという時に、落ち着いて自分と子どもの命を守るための行動シミュレーションから学んでいます。ただ、防災知識を得ても実際の備災行動への結び付きにくさもあり、防災カフェの運営協力団体・個人の方々と新たに「にしよど親子防災部」を発足しました。親子防災ピクニックや実践勉強会、情報発信を通じて、日常に防災を取り入れ、助け合える地域ネットワーク形成を目指しています。



災害時の子ども支援団体の運営から考える防災シミュレーション研修
 (大阪ボランティア協会)

日常的には避難訓練を実施している子ども支援活動団体にとっても、災害時は平時の状態ではありません。想定外の態勢の中で、子どもたちの安全の確保は当然のことながら、それに加え、子どもや保護者の心理不安を軽減するための支援活動の拡張や事業の早期再開が求められてくるようになります。緊急事態以降の団体運営という点で、自分たちの活動の備えや心構え、そして、援助を得られるようなネットワークづくりは、非常時にはできません。

そこで、大阪ボランティア協会では、実際に起こりうる被害設定を踏まえ、それぞれの団体の動きをタイムラインで抽出するシミュレーション研修を開催し、平時にしかできない「想定外の想定」を共有できるワークを提供しています。複数の団体が集まって、団体ごとにどのような動きになるかを平行に並べてみることで、想定しなかったことや新たな視点を発見し、切実になる運営課題を考える機会にもなっています。この研修では、団体の現場に出向いて、団体の理事や拠点のリーダーが集まる研修も実施。これまでの実際の被災現場での例を示しながら、緊急時に起こりうる環境変化のダメージや不足する資源を洗い出して、運営面の課題を考える訓練の機会として、好評を得ています。



平時にこそ読んで、普段から押さえておきたい！

「子どものための心理的応急処置（Psychological First Aid for Children：子どものためのPFA）」

子どもの認知発達段階の特性にあわせて、災害などの緊急時に子どものところを傷つけずに対応できるように「見る、聴く、つなぐ」という視点から、子どもの支援の際に押さえないポイントや原則が盛り込まれています。（「子どものためのPFA」とは、世界保健機関（WHO）などが作成したPFAマニュアルをもとにセーブ・ザ・チルドレンが2013年に制作）

<http://www.savechildren.or.jp/lp/pfa/>



理念編と実践編、2部構成になっています。

「子どもにやさしい空間」ガイドブック

緊急時の「子どもにやさしい空間」づくりにおける心構えやそのための手続きノウハウなどをまとめたハンドブック。第1部（理念編）では心がけておきたいことを、第2部（実践編）では、空間づくりのステップやチェック項目、それに役立つフォーマット例などの記載があり、とても実務的な内容です。作成：（公財）日本ユニセフ協会、（国研）国立精神・神経医療研究センター ストレス・災害時こころの情報支援センター

<https://www.unicef.or.jp/cfs/>
<https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/cfs2.html>



心の支援活動の基本を押さえるために

「被災者の心を支えるために」地域で支援活動をする人の心得

世界保健機関（WHO）が心のケア活動の指針として発表した「WHO版心理的応急処置（PFA）ー現場の支援者のガイドー」（監訳：（独）国立精神・神経医療研究センター、翻訳：ケア宮城、ブラン・インターナショナル・ジャパン）を編集。日本国内での支援活動の際、被災者の心に配慮した活動のために必要な視点とともに、支援者ケアについても触れています。

<https://www2.sed.tohoku.ac.jp/~caremiya/>



寄り添いをテーマに、他の取り組みの事例から学べるポイントも

「被災者支援プログラム集」（有料配布：540円）

被災者支援の専門ではない人にとっても、災害のことを考える機会になるよう、6つのテーマの支援プログラムを紹介している冊子です。その中の一つのテーマとして「子どもの遊び場・学習支援ボランティア」のプログラム運営のノウハウを紹介しています。平時から、子ども食堂や子どもの学習支援、子どもの遊び場づくりなどを行っている団体の方に是非読んでいただきたい一冊です。

作成：東京都災害ボランティアセンターアクションプラン推進会議



イラスト付きで、子どももとつきやすいツールとして

「考える防災教室」

発災時の対応の答えはひとつではありません。自ら考え、自分なりのやり方を見つけられるツールとして、イラスト付きで小学校高学年の子どもたちにわかりやすい内容です。教師用の解説書もあり、子どもたちとのコミュニケーションツールとしても活用できます。

作成：大阪ガス（株）

<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/bousai/booklet/index.html>



若者の目線から、子どもたちの支えの視点を

「ボクたち、ワタシたちの減災アクション」

「復旧・復興のために子どもたちは何ができるか」という視点から、フェーズ（局面）別に分けて、「発災後に子どもたちは何ができるか」「自分たちの身を守るためには？」「災害が起きる前、日常ではどんな準備を？」など、子どもたちに理解しやすいよう、配慮されたウェブコンテンツになっています。

作成：国際ボランティア学生協会（IVUSA）

<http://gensaiaction.net/>



災害時に子ども支援の大きなつながりを

災害時には、子どもも保護者も、支援者も被災します。その中で「なんとか子どもを支えなければ」という尊い精神でがんばって、がんばりすぎて苦しむ方が多くいらっしゃいます。

深呼吸して、周りを見てください。支えたい人や団体は、被災地内外にたくさんいます。そういった人や団体と平常時からつながり、また災害時にもつながる場を作って、子ども支援の大きなつながりを作っていきます。

このハンドブックがその一助になれば幸いです。

跡見学園女子大学、一般社団法人福祉防災コミュニティ協会 鍵屋 一

ヒアリング協力

伊藤 千佐子 （特定非営利活動法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク）
高山 和成 （一般社団法人岡山次世代スクール協会）

協力者：災害時のスペシャルニーズ支援事業 こども支援研究会

勝木 洋子 （神戸親和女子大学）【研究会座長】
片山 誠 （一般社団法人 72 時間サバイバル教育協会）
河田 のどか （特定非営利活動法人さくらネット）
徳谷 章子 （特定非営利活動法人ハートフレンド）
福田 留美 （特定非営利活動法人にしよどにこネット）
藤田 由紀子 （あわてんぼうワンちゃんとゆっくりカタツムリさんの会 ステップ・ステップ）
水谷 綾 （社会福祉法人大阪ボランティア協会）【研究会コーディネーター】

監修

鍵屋 一 （跡見学園女子大学、一般社団法人福祉防災コミュニティ協会）

事務局

社会福祉法人大阪ボランティア協会

梅原 聡、岡村 こず恵、小林 政夫、永井 美佳、湯井 恵美子、萬浪 侑子

2019 年 3 月 31 日 発行

発行：社会福祉法人 大阪ボランティア協会

〒540-0012 大阪市中央区谷町 2 丁目 2-20 2F 市民活動スクエア「CANVAS 谷町」

TEL 06-6809-4901 FAX 06-6809-4902

Email office@osakavol.org URL <http://www.osakavol.org/>

印刷・製本：企業組合 ねっこの輪 イラスト：鈴木百合香・永田千砂
デザイン・編集協力：ちまちま工房